2025年12月10日　デイリー版3面

物流/港運

兵機海運、FCトラック関西初導入、協力会社通じ、CO2削減に貢献

【関西】兵機海運（神戸市、大東慶治社長）は12月、協力会社の大前運送店（同、南谷知子社長）とロジスト（同、打保陽代表取締役）を通じ、水素を利用した燃料電池（FC）小型トラック2台を導入した。兵庫県と神戸市の協力を得たもので、FC小型トラックの導入は関西で初めて。貨物の輸配送でCO2（二酸化炭素）排出削減を推し進め、荷主の支持や新規開拓につなげていく。

導入したのはいすゞエルフをベースに、いすゞとトヨタ自動車が共同開発したFC小型トラック。最大積載量は2800キログラム、航続距離は約260キロメートルで、水素燃料タンクの容量は10・5キログラム。兵庫県と神戸市の協力を得て、大前運送店、ロジスト両社が1台ずつ導入した。

兵機海運が協力会社と共に導入したFC小型トラック

大東社長(中央)と、大前運送店の南谷会長(左)、ロジストの打保代表取締役(右)

商用のFC小型トラックは関西で初導入となる。関係者によると、FC小型トラックは現状で充電に時間がかかる電気自動車（EV）と比べ、燃料充塡（じゅうてん）が5―10分程度と既存のディーゼル車両に近く、使い勝手で優位性がある。

一方、燃料を供給する水素ステーションは現時点で全国で約150カ所、兵庫県内は神戸、姫路、三木、尼崎各市内に計5カ所あり、神戸市内は2026年にもう1カ所開設する計画があるという。

神戸市が水素の利活用を進める中、兵機海運はFC小型トラックの導入を通じ環境への取り組みをアピールするとともに、神戸港のイメージ向上に寄与する考え。大東社長は「今後車両の大型化が見込まれる中での前例になる」とし、協力2会社と共に検討を進めた。

大前運送店の南谷幸宏会長は「（現行のFC小型トラックは）積載量が4トン車並みに積めるメリットがある」、ロジストの打保代表取締役は「関西初導入となり、環境問題に共に取り組めるのは光栄」と話す。

導入費用や運用コストといった課題面は、兵庫県、神戸市の補助を活用することで大幅な負担増は回避できる見通しという。一方、水素ステーションの数が限られているため、現時点では運用面での工夫が求められる。

積載量や航続距離も踏まえ、現時点では主にCFS（コンテナフレートステーション）間の貨物の横持ちをはじめ、小回りを利かせた使用に適しているという。燃料を充填するタイミングや運行コースなどの検証を通じ、最適化を図っていく方針だ。

大東社長は「時期尚早かという思いもあったが、先駆けてCO2削減に貢献することで、神戸港の今後の発展にもつながればいい」と話す。また、今後のFCトラックの大型化進展による積載量増加に期待感を示す。